

清流通信

Shimanogawa Monogatari

第181章 通信日 ● 2011年11月25日

四万十川物語

〈送信者〉

財団法人 四万十川財団

TEL : 0880-29-0200

FAX : 0880-29-0201

E-mail: office@shimanto.or.jp

URL: http://www.shimanto.or.jp

しまんとがわ
川漁師倶楽部

四万十川の伝統川漁を継承するため！

清流通信読者の皆様こんにちは。

今回は四万十市から、伝統川漁が体験できる“しまんとがわ川漁師倶楽部”的小野隆利さんについてお伝えします。



四万十川は、その魚類の多さ漁業資源の豊富さから、川で生計を立てる“川漁師”が存在する、日本の数少ない川の一つだ。その四万十川の川漁には、“投網漁”や“鮎の火振り漁”、“エビ・ウナギの柴漬漁”“石ぐろ漁”などがあるが、それらは先祖代々引き継がれてきた“伝統漁法”と言われるもので、川魚の習性を基に、独特的工夫を施し後世に伝えられており、漁の道具とともに地域の個性を表した流域の大切な文化となっている。

しかし近年、河川環境の変化等により、川漁による収量減少が続いている。今では、川漁で生計を立てる川漁師は数えるほどしかいなくなり、それと共に、伝統漁法を引き継ぐ人も、少なくなってきたという。

四万十川の伝統川漁

11月中ばの四万十川河口域。川の水と海の水とが混ざり合う汽水域で、“しまんとがわ川漁師倶楽部”という名の“川漁師体験施設”を運営する、小野隆利さんを訪ねた。

「四万十川には先代から引き継いできた“伝統漁法”があります。しかし後継者がいないことや漁額高の減少などを受けて、伝統漁法が廃れつつある。だから、これらを継承すべく伝統漁法を記録し、漁具の保存をしなければならないと思い、またその為に、観光化を図ることで漁師の収入の維持向上をはかり、後継者となる人材を、体験事業を通じて育成していかねばならないと思ったことが、この“川漁師倶楽部”をつくった動機でした。」

四季折々に営まれる伝統川漁は、流域の人々の生活を支えその自然と調和し、“四万十川の風物詩”と謳われてきた。

例えば、“投網漁”。小舟の舳先から網を投げ、円く広がった網で魚を捕まえる漁法だ。畳十畳ほどもある広い網を投げるには至難の業で、大きく反動を付け、網を身体の後でぐるりと一回転させる“土佐打ち”という四万十川独特のダイナミックな方法は、かなりの熟練を要するという。「写真を撮る時は身体の後から。そうすると網の広がりがよくわかる。」小野さんは、“川漁師倶楽部”HPトップで使った写真（↑上）について、得意げにそう話してくれた。

また“柴漬漁（シバヅケ漁）”がある。柴漬漁とは、椎の木などの枝を束ねたもの（柴）を、一晩川に沈め、夜の間に枝の中に潜んでいたウナギ・エビなどを、翌朝柴ごと網でくい取る漁法だ。「いつか、その柴漬漁で四万十川を

つないでみたい。というのは、上流域で捕れるもの、中流で捕れるもの、下流でのもの、違っていておもしろいはず。上流や中流で捕れる物は、自分達のやっている下流域で捕れる物とは違うと思いますよ。」
196km の四万十川を、“川漁師体験” でつないでみたい、まだまだ知らないことの多い四万十川のことを、もっともっと知りたいし、知ってもらいたい、そういう小野さんの気持ちが表れている、それは彼と“川漁師俱楽部” の夢だ。

四万十川 “川漁師体験俱楽部”

小野さんが、現在、川漁師仲間と運営する“しまんとがわ川漁師俱楽部”は、2007年5月に設立された。

それに先立つ10年間ほど、小野さんは河口域の観光施設で、団体の“川漁師体験”受入のインストラクターとして働いてきた。「団体の場合、知らない人と一緒に初めてのことを体験するのは、身構えてしまう人が多いのです。もっとリラックスして体験してもらえるように出来ないかなと考え、小さな舟で、小グループを受け入れられるこの“川漁師俱楽部”を、仲間と一緒に始めました。現在、ここには4~5人の川漁師がいて、客の要望にあわせ担当を変えています。自分も川漁師として、体験メニューを持っていますが、主には、そのコーディネートと、ライフジャケットの手配などの“安全管理”が自分の仕事です。」

「四万十川の水が汚くなったのは事実、魚が少なくなった、捕れなくなったのも事実です。でも、来るお客さんにとっての四万十川は、過去ではなく現在で、昔捕れたかどうかは関係がない。だから、今の四万十川を見てもらって、そこから訴えられることを自分なりに伝えていきたい。例えば、小さな魚が網にかかったら、お客様から『こんな小さな魚は捕ったらダメでしょう？逃がしてやりましょう』と言ってくれます。それは、四万十川の環境のことを、既に、彼ら自身で考え始めているのだと思う。」

四万十川とこれから

年々、繰り返し訪れるリピーターも多くなってきた。“こんにちは”より“おかえりなさい”と挨拶出来る人が多くなったという。しかし、“川漁師俱楽部”的運営は、まだまだ軌道には乗っていない。夏は、休みなしで多忙を極めるが、シーズンオフの冬には、本当に暇になる。本業の川漁も、ここ最近は不漁続きた。

「ここら辺で採れる天然スジアオノリも、今年は最悪、1トン台でした。他の漁もしかりです。だから、若いモンも生活出来ないからこの地を離れる。」川漁だけでは生活が出来なくなってきた現実を、誰よりもよくわかっているのは、そこに残って生活を続ける者だ。四万十川で生まれ育った小野さんは、幼い頃からこの川と共に生きてきた。四万十川から多くのことを教わって、多くの恵を得てきたからこそ、この地で暮らす厳しさも楽しさもわかっている。

「残念ながら、四万十川を取り巻く環境は年々悪くなっている。でも、そんなことを言っていても何も始まらない。現実を知って、それにどう向き合うかを考える力こそが、ここに暮らす自分達には必要なのだと思うのです。」現実を嘆く人は多い。けれども、それをどう打開していくのかを考えられる人は、それほど多くはない。

「50歳を過ぎてから、めっきり体力がなくなったがよ。だから若いモンを育てたいと思う。その為にも、この地でなんとか雇用を生み出したい。“観光”という形でも良いから、伝統漁法が残っていて欲しいと思う」笑いながらそう言って、四万十川を見つめる小野さんの横顔からは、この川と共に生きてきた、四万十川の川漁師の誇りと、『あきらめ、手をこまねいているだけの人ではありたくない』そういう決意のようなものが、ひしひしと伝わってきた。そして、晚秋の四万十川に目をやれば、「ほら、あれあれ！アオノリがそろそろ出始めてきたなぁ」

小野さんの指さす先には、四万十川の冬の風物詩、スジアオノリの緑色がゆらゆらと水面に揺れる。

今年も忘れずに、この川にスジアオノリが戻ってきた。

“この川を、この川から受けてきた恵みを、後世につないでいきたい。それは自分達の使命なのだ。”そんな想いを託す川舟で、今日も小野さんは、四万十川に出て行く。

